

二言語併用貨幣の伝播：ギリシア系バクトリア王国からクシャン朝まで

ギリシア系のバクトリア王国は、アレクサンドロス大王(在位、前 336-前 323)の没後、その東征軍の一部であるバクトリアの総督ディオドトス I 世(在位、前 256-前 248)が興した王国である。そのバクトリア王国のギリシア人諸王のうち、デメトリオス 1 世(在位、前 200-前 185)の時世になるとヒンドークシュ山脈を越えてインドの西北に進出した。これ以降の諸王の貨幣とヒンドークシュ山脈以北にとどまっていたころの諸王の貨幣とは異なる面がある。銘文についていえば、表裏に異なる文字と言語が書かれた貨幣、いわゆる二言語併用貨幣が現れる。そのデメトリオス 1 世には三人の息子がいたらしい。デメトリオス 2 世(在位、前 180-前 165)、アガトクレス(在位、前 180-前 165)、パンタレオン(在位、前 185-前 175)であり、それぞれの王名をもつ二言語併用貨幣が発行されている。デメトリオスとするものはギリシア文字とカローシュティー文字によるものであり¹、アガトクレス、パンタレオンとするものにはギリシア文字とブラーフミー文字によるものがある²。もっとも、周辺地域と後代に与えた影響という点では、前者のギリシア文字とカローシュティー文字銘文による二言語併用貨幣の方がはるかに大きい。なお、バクトリア諸王の系譜と在位年は前田 1992:146 による。

その後、インド西北の地においては、ギリシア系バクトリア王国に代わり、幾つかの民族の興亡があったが、二言語併用貨幣は発行され続けた。ここではそのあたりの資料を確認する。

■インド・グreek朝絶頂期の二言語併用貨幣

インド・グreek朝というと、デメトリオス 1 世の息子デメトリオス 2 世以降ヒンドークシュ山脈以南を統治したギリシア人の王国を指すようである。以下に紹介する貨幣は、アガトクレスの娘アガトクレイアと結ばれたことにより王系に列したとされる武将メナンドロスの発行したものである。メナンドロス(在位、前 155-前 130)は、エウクラティデス(在位、前 171-前 155)の死後、インド・グreek朝の絶頂期を作り上げた人物であり、また仏教を最初に受け入れたギリシア系の王としても知られている。『ミリンダ王の問い』という書は仏教の経典に準ずるものとして扱われるわけであるが、ここではギリシアのミリンダ王とインドのナーガセーナ尊者の対話が展開されている。対話の主人公であるミリンダ王とはメナンドロス王のことである。

表には、王の胸像の周囲にギリシア文字・ギリシア語が二行書かれている。一行は 9 時の位置より時計回りに貨幣の内側よりみて B A Σ I Λ E Ω Σ (basileōs 王の)、Σ Ω T H P O Σ (sōtēros 救済者の)とある。他の一行は 8 時の位置より反時計回りに貨幣の外側よりみて M E N A N Δ P O Y (menandrou メナンドロスの)とある。全体で“救済者たる王メナンド

¹ 前田 1992 参照。“これらのコインはいずれもデメトリオス II 世のものと考えられる。そしてこの二言語併用には特別の意味があったと思われる。それはカローシュティー語文化圏とデメトリオス II 世との深いかわりを示すものにほかならない。デメトリオスがインダス河流域の経営に力をふるったからなのかもしれない。”(161 頁)

² 貨幣の見本は、パンタレオンについてはグプタ 2001 の 217 頁 No. 36 及び Mitchiner1975 の p. 84 参照。アガトクレスについてはジョン・ウィリアムズ 1998 の 46 頁及び Mitchiner1975 の p. 80 参照。

ロスの”と読める。

裏には、神の立像の周囲にカローシュティー文字・インド俗語(ガンダーラ語)が二行書かれている。一行は3時の位置より反時計回りに貨幣の内側よりみて maharajasa(大王の)、tratarasa(救済者の)とある。他の一行は4時半の位置より時計回りに貨幣の外側よりみて menamdrasa(メナンドロスの)とある。3単語に単数属格語尾 asa があり³、全体で“救済者たる王メナンドロスの”と読める⁴。



表



裏

■インド・スキタイ朝の二言語併用貨幣

その後、紀元前85年頃には北方よりイラン系の遊牧国家が侵入し、インド・グreek朝は滅びていくこととなる。インド西北に新たに興ったイラン系のマウエス、アゼス、アジリセスなどの諸王の王国をインド・スキタイ朝と称する。インド・スキタイ朝の諸王はインド・グreek朝のギリシア文化を取り入れたようである⁵。次に紹介する貨幣はアゼス王の発行にかかる銀貨である。

表には、この民族を彷彿とさせる人物の立像の周囲にギリシア文字・ギリシア語が二行書かれている。一行は7時の位置より時計回りに貨幣の内側よりみて ΒΑΣΙΛΕΩΣ (basileōs 王の)、ΒΑΣΙΛΕΩΝ (basileōn 諸王の)、ΜΕΓΑΛΟΥ (megalou 偉大な)とある。他の一行は7時の位置より反時計回りに貨幣の外側よりみて ΑΖΟΥ (azou アゼスの)とある。全体で“諸王の王にして偉大なるアゼスの”と読める。

裏には、女神の立像の周囲にカローシュティー文字・インド俗語(ガンダーラ語)が二行書かれている。一行は5時の位置より反時計回りに貨幣の内側よりみて maharajasa(大王の)、rajarajasa(諸王の)、mahatasa(偉大なる)とある。他の一行は5時半の位置より時計

³ Burrow 1937 の 22 頁に単数属格語尾として -asa を挙げる。この書は中国トルキスタンのカローシュティー文書を扱ったものであり、本貨幣とは時代も地域も異なるが、これによって貨幣の asa をも属格語尾として大過はないであろう。

⁴ 中村 2004 参照。

⁵ 田辺 1992 の 57 頁によると“ガンダーラ地方を支配したこれらイラン系の遊牧国家インド・スキタイ朝のマウエス、アゼス、アジリセスなどの諸王はインド・グreek朝のギリシア文化を積極的に取り入れ、コインもインド・グreek朝のコインに準じた銀貨(銅が混入したピロンも含めて)と銅貨を発行した。”とある。なお、“紀元前85年頃”という年代については前田 1992 の 230 頁参照。

回りに貨幣の外側よりみて ayasa(アゼスの)とある。全体で“諸王の王にして偉大なるアゼスの”と読める⁶。



表



裏

“諸王の王”という表現がギリシア文字・ギリシア語とカローシュティ文字・インド俗語(ガンダーラ語)の両者に見えるが、これはイラン文化の影響を受けた貨幣にみられる表現形式である。

■クシャン朝の二言語併用貨幣

その後ヒンドークシュ山脈以北に興った遊牧民クシャン族は山脈以南に進出し、インド西北の地を中心として栄えた。いわゆるクシャン朝である。ここに紹介する貨幣はクシャン朝の最盛期を築いた有名なカニシカ王(在位、後 143-後 171)の曾祖父クジュラ・カドフィセス(在位、後 60-後 100)の発行になるものである。なお、クシャン朝諸王の在位年は小谷 2003 による。

表には、王の頭像の周囲にギリシア文字・ギリシア語が二行書かれている。一行は 6 時の位置より時計回りに貨幣の内側よりみて[B]A Σ I Λ E Ω Σ (basileōs 王の)、Σ T H P O Σ Σ [V] (stērossu 不明)とある。他の一行は 5 時の位置より反時計回りに貨幣の外側よりみて[E P M A I O V] (ヘルマイオスの)とある。[]は Mitchiner 2004:597 で補った部分。Σ T H P O Σ Σ [V]の意味するところは不明であるが、おそらくは Σ Ω T H P O Σ (sōtēros 救済者の)と関係のある語なのであろう。田辺 1992:173 はこの銘文を“救済主、ヘルマイオス王の”と読む。なお、ギリシア文字・ギリシア語銘文にみられるヘルマイオスはインド・スキタイ朝の王名である。これはインド・グreek朝最後の王とされるヘルマイオスの貨幣を模倣したものらしい。

裏には、ヘラクレスの立像の周囲にカローシュティ文字・インド俗語(ガンダーラ語)が一行書かれている。8 時の位置より反時計回りに貨幣の外側よりみて kushana(クシャン

⁶ 中村 2004 参照。

族)、yavugasa(翁侯(族長)の)、dhra[mathidasa](法に住みたる(法を堅持したる))⁷、[kujulaka]sasa(クジュラ・カドフィセスの)とある。[]は Mitchiner2004:597 で補った部分。意味するところは、“クシャン族の長、法に住みたる(法を堅持したる)クジュラ・カドフィセスの”ともなるうか。



表



裏

その後、クシャン朝もカニシカ王の時代になると、二言語併用貨幣は行われず、ギリシア文字・ギリシア語の銘文のみを持つ貨幣や、さらにはギリシア文字でイラン語の系統であるバクトリア語を表記した銘文のみを持つ貨幣が発行されるようになる。

【参考文献 (発行年順)】

- Burrow, T. 1937. *The Language of the Kharosthī Documents from Chinese Turkestan*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 渡邊 弘 1973. 『西域の古代貨幣』, 学習研究社。
- Michael Mitchiner 1975. *Indo-Greek and Indo-Scythian coinage Volume I. The early Indo-Greek and their antecedents*. London: Hawkins Publications.
- 田辺勝美編 1992. 『[平山コレクション]シルクロードのコイン』, 講談社。
- 前田耕作 1992. 『バクトリア王国の興亡』(レガリス文庫), 第三文明社。
- 水野弘元 1994. 『パーリ語辞典 (二訂版)』春秋社。
- ジョナサン・ウィリアムズ 編/湯浅起男訳 1998. 『図説 お金の歴史全書』, 東洋書林。第1刷 1998年, 第2刷 2002年。
- P. L. グプタ著/山崎元一他訳 2001. 『インド貨幣史 一古代から現代まで』刀水書房。
- 小谷仲男 2003. 「クシャン族とガンダーラ仏教」, 『NHKスペシャル文明の道 ②ヘレニズムと仏教』日本放送出版協会, 200-225頁。

⁷ 渡邊 1973:59 は“(仏)法に帰依したる”、Mitchiner 1988:597 は “Steadfast in the law”、田辺 1992:174 は “正法の人”とする。おそらく、thida はパーリ語の thita (形容詞) “住立せる、停住の”に相当する語であろう。パーリ語は水野 1994:114 参照。

中村雅之 2004. 「カローシュティ文字貨幣 3 種」, 『KOTONOHA』 第 22 号, 1-3 頁。

Michael Mitchiner 2004. *Ancient trade and early coinage Volume one*. London: Hawkins Publications.

(文責 : 吉池孝一 2010. 6. 15)